

・敬老の日

敬老の日は、9月にある「国民の祝日」のひとつです。

「国民の祝日に関する法律」(祝日法)の改正により、2003年から毎年9月の第3月曜日に改められました。

「多年にわたり社会に尽くしてきた老人を敬愛し、長寿を祝う日」が趣旨であるとされています。

敬老の日で祝う対象者の年齢は、特に決まっていません。老人福祉法という法律では、65歳以上からが「高齢者」とであるとされていますが、その年齢以下でもかまわない、というのが一般的な考え方です。対象者に孫が生まれて成長した頃、お祝いをするケースが多いようです。

完成保証悪用し中間金詐取の事件録、海外逃亡した住宅会社社長は帰国後逮捕

2002年の秋、東京の民間保証会社に、ユーザーからの問い合わせが殺到した。ユーザーの1人は「基礎工事を終わった後、もう3カ月も現場が動いていない」と言い、別のユーザーは「7月に引き渡しははずだったが、連絡がない」と言う。

完成保証制度の隙を突かれる

5件の工事の状況はバラバラで、完成直前のものから、基礎工事段階で止まっているのもであった。「自転車操業経営が行き詰まり、現場を動かさなくなったのだらう」(保証会社の担当者)と思われた。

共通するのは、住宅会社社長に頼まれるまま、5人のユーザーが高額の中間金を支払っていたことだ。ユーザーが支払った中間金の総額は、着手金も含めて4500万円に上ったと推定される。

「社長が『保証会社が中間金を支払うタイミングだと知らせてきた』と、もっともらしい通知書を持ってきたので、お金を支払った」

ユーザーの1人は、保証会社の担当者にそう話したという。完成保証制度が悪用されたのは明らかだった。11月に入ると、社長は行方をくらました。同社は社長の母親が経理部長を務めていたが、その母親も社長がどこへ行ったか知らされていなかった。

ユーザー5人は社長を、詐欺容疑で刑事告発した。2年後の04年4月、社長は逮捕された。社長は罪状を認めているという。

社長は行方をくらました後、知り合いを頼ってフィリピンへ海外逃亡していたことが逮捕後に判明した。「1年程度でお金を使い果たし、帰国して国内に潜伏していたようだ」と、関係者は話す。

事件の経緯

ある住宅フランチャイズチェーン (FC)グループに加盟した住宅会社A社の社長が起こした事件。A社は2000年3月にFCへ加盟し、FC本部の指導に従って民間の完成保証会社に登録したが、02年に債務状態の悪化を理由に登録を取り消された。A社はその後も「完成保証が付いている」と施主に説明して工事を受注していたが、02年10月ごろに自転車操業が行き詰まって工事を続けられなくなった。行き詰まった時点での工事現場は5カ所だった。被害総額は約4500万円と推定された。A社社長は夜逃げ同然に、会社の現金を持ってフィリピンに逃亡したという。

事件の結果

住宅会社A社社長の逃亡後、工事を中断された5件の施主が、同社長を詐欺容疑および保険金詐欺容疑で刑事告発した。同社長は2003年ごろに海外から帰国したと見られる。04年に帰国が分かり、4月14日に詐欺容疑で逮捕された。5件とも実際には保証契約を結んでいなかったため、保険金詐欺容疑は成り立たなかった。5件の被害金は、警察への刑事告発が行われた時点で、A社が加盟していた住宅フランチャイズチェーン (FC) 本部が「見舞金」として補償した。最終的に、ユーザーは救済されたことになる。

「保証を悪用して中間金を得ていなければ、倒産寸前の企業による債務不履行事案にすぎない」

完成保証に関係する保険会社では、この事件に迷惑顔だ。だが「完成保証」制度の悪用を保証会社側は監視できなかった。ユーザーを保護するはずの制度の隙を突かれた形だ。

完成保証では、住宅会社が保証先として企業登録を行う際、保証会社はその経営内容を審査し、債務不履行を起こさない財務状況であることを確認する。

保証は個別の建築工事請負契約ごとに行われる。保証契約は、ユーザーとの請負契約とは別に、保証会社が請負契約書の審査を終えた時点で、請負契約を結んだ日まで遡って成立する。

ここで住宅会社がユーザーから預かった申込書と保証料を保証会社に送らなかったとしても、ユーザーには分からない。保証会社も、そうした事態を知るすべはなく、当然ながら保証契約は存在しない。

火災保険などは、代理店に申し込みをして保険料を支払えば、その時点から契約が発効する。保険証書が届くまでは、保険料の領収書が保険証書の代わりとなる。だが完成保証の場合、住宅会社は保証会社の代理店ではなく、住宅会社がユーザーに出した領収書は保証会社を拘束するわけではない。

完成保証を行う住宅保証機構は、事件を受けて「保証書が届かないのを不審に思わないなど、ユーザーが保証システムをよく理解していないのは、制度の周知が進んでいない面も大きいのではないか」と話す。事件に悪用された民間保証会社も、「住宅会社に対し、ユーザーに対する説明を徹底してもらうように努力したい」としている。

だが住宅会社は、工事が止まる可能性について説明すればするほど、自社の経営のもろさに触れなければならない矛盾を抱えている。代理店でもない住宅会社に保証会社が制度の説明を一任していたこと自体に、詐欺師の付け込む隙があったのではないかと。

元記事:日経XTECHより

第54回 人も今月もウォーキングにお付き合いください

三成 哲也
の

ウォーキング 日誌



2025年8月24日 円海山 山路ウォーキング

連日の猛暑で休日の早朝ウォーキングもちょっと躊躇いがちになる。それでもお盆休み中も毎日歩き続けた。ウォーキング歴10年以上になると何か義務感のようなものが自分の中に存在して、台風でも来ない限り休むと天罰が下されるような気がする。

今日は鎌倉駅まで電車移動をして鎌倉駅から江の島まで歩こうと計画していたが、さすがにこの猛暑…134号線沿いを江の島に向かって歩くと強い日差しを遮るものが全くない。予定を変更して円海山を歩くことにした。円海山は起伏は結構あるが木々が生茂っているため日差しは遮断してくれる。

港南台五丁目の信号の先を右折して山路に入る。いきなり上り坂だ。上り坂のてっぺんまで行くと眼下に住宅、商業施設が見え、結構上ったのだと実感できる。たかだか標高160m足らずの山ではあるが、実際に上ると結構つらい。

自分自身登山の経験は皆無に等しい。小学校高学年の遠足で1200m位の山に上ったのが最後でそれ以後は山登りなどしたことがない。ただ生涯一度は富士山に登ってみたいと思っているが、なかなかその気になれない。登るならここ1〜2年のまだ体力と気力がある時だろうが、躊躇いがちだ。

山路を進むと山路の中央を堂々と歩いているクワガタを見つけた。危ないで棒切れで林の方に誘導する。小学校の頃夏休みの自由研究で「昆虫採集」を提出していた友達がいいた。きれいに蝶々から蝉、トンボといろいろな昆虫を標本にしていた。そういえば昆虫採集セットを売っていてそこには注射器や張り付けるピンが入っていたような記憶がある。生きている蝉やトンボを注射器で殺してピンで張り付けていく。今思うと随分残酷なことをしていたようだ。夏休みの宿題の定番といえば「読書感想文」だ。今でこそ本はよく読むようになったが小さい頃は、殆ど読書などした記憶がない。仲のよかった友達に高校生の姉がいて「俺はお姉ちゃんに書いてもらったぞ」と自慢していた。すごく羨ましかった。その姉に手伝ってもらった作品が入選して困惑していた友の顔を思い出すと今でも可笑しくなる。

夏休みの宿題と言えば、長男の家の末っ子が夏休みの宿題が捗らないから環境を変えてうちでもよいかと聞いてきた。勿論OKではあるが別に目的があるような気がする。案の定私の勤は当たり、宿題もそこそこで午後から商業施設へ出向いて行った。

円海山の頂上付近にある広場まで来ていた。ここでは近所のお年寄り達がラジオ体操をしている場所だ。まだ早いせいか誰もいない。私たちの子供の頃は近くの公園に集まってラジオ体操をしていた。出席すると当番の人がラジオ体操手帳に判子を押してくれた。皆勤すると鉛筆やノートもらった覚えがある。最近子供たちがラジオ体操をしている姿を全く見かけなくなった。自分の息子たちがどうだったのかも全く覚えがない。戦後体力不足を解消するために始まったラジオ体操らしいが、いまの子供たちにも当てはまるのではないかと。スマホやゲームに費やす時間があれば是非ラジオ体操くらいはやって欲しいものだ。

円海山の山路から下って行く途中に大きな栗の木が何本もある。鉄扉で施錠されており、中には入れない。沢山の実をつけた栗を見ると秋も近いと思うが、この暑さ、いつになったら秋が訪れることやら…Tシャツはもうびしょ濡れだ。

笹下釜利谷街道に出てひたすら歩く。今日も35度以上の猛暑日か。笹下釜利谷街道の栗木の信号を左折してしばらく歩くとまた円海山の山路に入る。強く降り注ぐ日差しは否応なく体力を奪い取っていく。

あともう少し家に着くまで頑張ろう。